

あん摩マッサージ指圧師・はり師・きゅう師学校養成施設における リメディアル教育としての「補習授業」に関する実態調査 —社会人学生と高卒学生の意識の差異に着目して—

中井 朋美^{*1), 2)}, 河井 正隆³⁾

¹⁾明治国際医療大学大学院鍼灸学研究科, ²⁾静岡医療学園専門学校, ³⁾明治国際医療大学基礎教養講座

要 旨 【目的】本研究の目的は、あん摩マッサージ指圧師・はり師・きゅう師学校養成施設におけるリメディアル教育における「補習授業」の実態を、学生アンケート調査から明らかにすることである。

【方法】79校（令和3年6月現在）から調査協力を得た21校（26.6%）の3年生493名を対象にWeb調査を実施した（期間：令和3年8月～10月）。

【結果】21校の3年生325名（回収率65.9%）から回答を得た。分析結果から、第1に学習方略として今を大事にする取り組みは、高卒学生より社会人学生に多かった。第2に学習計画の立案には両者に差は無く学習計画を「立てる」が多く見られた。第3に学習計画の立案と成績の関係は、学習計画を「立てる」両者の学生とも成績が「下位1/3」の受講者であった。第4に「補習授業」受講と定期試験の成績の関係は両者ともに非受講者は「上位1/3」、受講者は「下位1/3」であった。

【考察】社会人学生は高卒学生よりも現在の学習に重点を置いていることが判明した。補習授業の受講は成績上位者には少なく、学習計画の有無は成績に大きな影響を与えていないと言える。

【結語】今回の調査からリメディアル教育としての「補習授業」の実態が明らかとなった。

Key words 社会人学生 adult student, 高卒学生 high school graduation student, リメディアル教育 remedial education, 補習授業 supplementary lesson, 意識調査 awareness survey

1. はじめに

1. 高等教育におけるリメディアル教育

我が国では1960年代から70年代におけるベビーブームにより、高校進学率も急激に増加し、1980年代の94%から現在に至るまで高校進学を希望する

生徒のほとんどは入学できる状況となった。さらに、大学進学率も戦後の10%程度から1980年代は37%と急上昇し量的拡大が生じた。そして、大学進学希望者を入学定員総数が上回る、いわゆる「大学全入」時代の到来が2023年または2024年4月に予測されている¹⁾。一方、同じ高等教育機関である専門学校の2020年度における新規高卒者の進学率は16.9%となり、進学率は前年度より0.5ポイント上昇した²⁾。

このように、大学と専門学校を含めた高等教育機

*連絡先：〒421-0115 静岡市駿河区みずほ5-14-22
静岡医療学園専門学校
E-mail: nakai@smc.ac.jp

関への進学率の増加という量的側面に伴い、質的な面での学生の多様化が生じることにもなった。それは、学生のなかには初等・中等教育で培った学業文化（例えば、高校と大学との学びの差異など）が合わず、学業についていけない学生も多く存在することになった³⁾。学生を受け入れた教育機関には、学生に対する教育の質保証という倫理的責任があり、その意味でリメディアル教育の重要性が一層強調されることにもなった⁴⁾。

専門学校に話を移すと、文部科学省の「我が国の高等教育の将来像（答申）」（平成17年1月28日中央教育審議会）⁵⁾では、専門学校を「実践的な職業教育・専門技術教育機関」と位置付ける。とくに、資格の取得を目指す諸学科では、即戦力となる人材育成のため「完成教育機能」や「しつけ」機能を多面的に展開し、社会への接続部分に力を入れる学校が多いとされる⁶⁾。そのため、必要な基礎知識が不足している学生に対して、その学力を補うリメディアル教育を実施することが多い。実際問題、資格取得という目標に到達する見込みのない学生も少なからず存在する実情のなか、学力不足を補うリメディアル教育の実施が喫緊の課題と思われる。

2. リメディアル教育について

リメディアル教育という用語は、我が国では1995～1996年に登場する。荒井ら⁷⁾は「高校レベルの物理や化学、あるいは数学などの科目を新入生向けに開講する大学が増えている。それら5科目群は補正教育やリメディアル教育と呼ばれているが、その目的は大学へ入学したにもかかわらず、そのままでは正規の学習についていけない学生たちの学力向上にある」と述べており、大学入学前の学力を補う意味でリメディアル教育を定義する。一方、穂屋下⁸⁾によると「日本の大学で使うリメディアル教育は、米国のカレッジでの『Developmental Education』に相当している。『Developmental Education』には、『発展させ、次の段階に進むための教育』といった積極的な意味を含んでいる」と指摘する。また、石毛ら⁹⁾や谷川¹⁰⁾はリメディアル教育を学力の補完的意味

ではなく、「卒業までに学生が学業を進めて行く上において必要な学習支援」と定義する。

これらのことから、リメディアル教育は「補習教育」と「Developmental Education」の両者を含んだものと解釈でき、単に基礎学力のための補習だけではなく、初年次教育や専門科目、キャリア教育なども活動の範囲とする¹¹⁾。そのため、多くの教育機関がそれぞれの形態や目的で「リメディアル教育」を実施することになる¹²⁾。

また、リメディアル教育に関する専門学会として「日本リメディアル教育学会」が2005年に発足し¹³⁾、その学会におけるリメディアル教育の定義は学修支援と同義であり、支援対象となる学生は基礎学力向上を目指す学生から就職後のスキル習得を目指す学生とさまざまである。つまり、リメディアル教育は基礎学力向上を意図した学修支援など、多様化する学生に合わせた今日的な教育と言える。

3. 本研究の目的

本研究では、あん摩マッサージ指圧師・はり師・きゅう師学校養成施設（以下、あはき専門学校という）におけるリメディアル教育を、学力の向上を意図した学修支援としての「補習授業」と定め、全国の学生（3年生）に対してアンケート調査を実施し、学生の視点からその実態を明らかにすることを目的とした。

その実態とは次の7つである。1つに属性として年齢と社会人経験の有無、2つに「補習授業」の前提として普段の学習方略、3つに「補習授業」対象者の割合、4つに学習計画の立案とその遂行度、5つに学習計画の立案および成績と「補習授業」受講との関係、6つに「補習授業」に対する感想、7つに「補習授業」の受講者・非受講者および成績との関連。

あはき専門学校の特徴として、高卒学生のみならず社会人学生も多く在籍することから、本研究での学生の視点とは、その両者のリメディアル教育としての「補習授業」（以下、「補習授業」という）に関する意識の差異に注目する。なお、「高卒学生」とは高校卒業からそのまま専門学校へ入学した学生をい

表1 アンケートの設問項目

設問項目	内容
属性	・年齢 ・社会人経験の有無（社会人学生・高卒学生）
学習方略	①学習内容が難しくても、自分に必要だと思いながら頑張る。 ②後で困らない様に講義の内容をしっかりと聞く。 ③勉強している途中でそれまでの学習内容について復習する。 ④苦手な授業であってもよい成績を得ようと努力する。 ⑤何を求められているのか考えてから課題をする。 ⑥よく分かっているところとそうでないところを探しながら勉強する。 ⑦難しい学習に取り組む前に基礎が分かっているか確認する。 ⑧一日にどれくらい学習するのか考えてから取り組む。 ⑨試験勉強の前には計画を立てる。 ⑩勉強は時間を決めてする。 ⑪自分のできる範囲を考えながら勉強する。 ⑫勉強をした後に何か楽しいことが出来ると思うとやる気がでる。
補習授業に関する設問	・補習授業の対象者の有無 ・学習計画の立案の有無（立てる・立てない） ・学習計画の遂行度 ①国家試験補習授業を受けたくないと感じましたか。 ②講義において一番に何を求めますか。 ③講義において教員が1番学生に求めるものは何だと感じますか。 ④講義内容の理解度はどの程度ですか。 ⑤講義で理解できなかった部分の復習はどのタイミングで行いますか。 ⑥補習前と比べて自分の学力は向上していると感じますか。 ⑦現在、自分の学力に対して良い素質があると感じますか。 ⑧現在の自分の状況を好ましいと感じますか。 ⑨国家試験に対する不安（危機感）はどの程度ありますか。
成績	・直近の試験成績

注：丸数字は、設問項目の文言そのままを示す。

い、それ以外で一度就職や大学卒業後などを経て専門学校に入学した学生を「社会人学生」とした。

II. 方法

1. 調査の手続き

本調査は横断研究（アンケート調査）であり、郵送法（学校への調査依頼）とWeb調査（学生の回答）を併用する研究デザインとした。

具体的には2021年7月、事前に全国のあはき専門学校79校（同年6月現在）に郵送法で学生調査（3年生）の調査依頼を行った。その後、調査協力を得た学校に改めて調査対象者数分の調査依頼状を送付した。学校経由で学生に配布してもらった調査依頼状には、回答方法（Google formsに誘導するQRコードおよびURL）を記しWeb経由で回答を求めた。調査の実施時期は、2021年8月～10月とした。

倫理的配慮としては、学生個々への調査依頼状とGoogle formsの冒頭に次の3点を明記した。1つは、本調査の結果は本研究のみの活用で、回答結果は統計的に処理し個人を特定することはない。2つは、個人情報管理に関して十分に留意する。3つは、本調査への協力は任意であり回答により本研究への同意を得たとする、である。本調査は、明治国際医療大学ヒト研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：2021-011）。

2. アンケート結果の分析

本アンケートの分析項目は、回答者の「属性」「学習方略」「補習授業に関する設問」「成績」の4つである（表1）。

そのなかの一つ「学習方略」については、藤田¹⁴⁾の「自己調整学習方略」を下敷きに設問項目（12項目）を作成した。それらの設問では「普段勉強する時

の姿勢についてお聞きします」という問いかけにより具体的な学習の方法の姿勢や意識を求めた(表1:①~⑫).

アンケート結果の解析は、 χ^2 検定と残差分析を行った。なお、分析で用いる統計ソフトはSPSS (IBM SPSS Statistics, Version25)を採用した(有意水準5%未満)。

III. 結果

まず、はじめに調査票の回収状況を述べる。全国のはあき専門学校79校のうち調査協力を得た学校は21校(回収率:26.6%)であり、それら学校に在籍する3年生493名中325名から回答を得た(回収率:65.9%)。以下は、325名の回答結果である。

表2 年齢と社会人経験の有無

年代		社会人経験あり	社会人経験なし	合計
		(社会人学生)	(高卒学生)	
20代	度数(%)	43 (17.5%)	203 (82.5%)	246 (100.0%)
	調整済み残差	-12.455	12.455	
30代	度数(%)	36 (92.3%)	3 (7.7%)	39 (100.0%)
	調整済み残差	7.752	-7.752	
40代	度数(%)	30 (100.0%)	0 (0.0%)	30 (100.0%)
	調整済み残差	7.614	-7.614	
50代以降	度数(%)	9 (90.0%)	1 (10.0%)	10 (100.0%)
	調整済み残差	3.586	-3.586	
合計		118 (36.3%)	207 (63.7%)	325 (100.0%)

$\chi^2(3)=155.691, p=.000, \text{Cramer's } V=.692$

1. 年齢と社会人経験の有無

回答者の属性として、年齢と社会人経験の有無(社会人学生と高卒学生の区分)を問うた結果が表2である。表2から、全体で「社会人経験あり(社会人学生)」118名(36.3%)、「社会人経験なし(高卒学生)」207名(63.7%)であった。年代別で両者の差をみると、高卒学生が20代で203名(82.5%)となり、30代以上のほぼ全てが社会人学生であった($\chi^2(3)=155.691, p<.001, \text{Cramer's } V=.692$)。このことは、残差分析からも言える(「社会人経験なし(高卒学生)」20代:調整済み残差12.455、「社会人経験あり(社会人学生)」30代:7.752・40代:7.614・50代以降:3.586)。

2. 「補習授業」の前提として普段の学習方略

補習授業に論を進める前提として、その背景となる普段の学習方略を問うた。その結果が表3である。ここでの学習方略とは、具体的な学習の方法のみならず学習に取り組む姿勢・意識レベルも含めた。

表3の設問項目①~⑫のうち、社会人学生と高卒学生で有意な差があった項目は次の2つであった。

1つは「②後で困らない様に講義の内容をしっかりと聞く」($\chi^2(4)=12.575, p<.05, \text{Cramer's } V=.197$)、2つは「⑤何を求められているのか考えてから課題をする」($\chi^2(4)=10.797, p<.05, \text{Cramer's } V=.182$)であった。さらに、それらの項目の回答選択肢で、どの程度の差異があったかを知る目的で残差分析を行った。その主な特徴を次に示す。まず「②後で困らない様に講義の内容をしっかりと聞く」は、社会人学生の「非常にあてはまる」47名(39.8%)で調整済み残差:3.172、高卒学生の「どちらともいえない」51名(24.6%):2.374を示した。さらに「⑤何を求められているのか考えてから課題をする」は、「少しあてはまる」の社会人学生55名(46.6%)で調整済み残差:3.009、高卒学生62名(30.0%):-3.009であった。

一方、社会人学生と高卒学生の違いがなく有意な差がない項目は次の10点であった。「①学習内容が厳しくても自分に必要だと思いながら頑張る」「③勉強している途中でそれまでの学習内容について復習する」「④苦手な授業であってもよい成績を得ようと努力する」「⑥よく分かっているところとそうでないところを探しながら勉強する」「⑦難しい学習に取り組む前に基礎が分かっているか確認する」「⑧一日にどれくらい学習するのか考えてから取り組む」「⑨試験勉強の前には計画を立てる」「⑩勉強は時間を決めてする」「⑪自分のできる範囲を考えながら勉強する」「⑫勉強をした後に何か楽しいことが出来ると思う」とやる気がでる。

3. 「補習授業」対象者の割合

表4に示すとおり、補習授業対象者の割合は325名中「対象者である」126名(38.8%)、「対象者でない」

表3 「補習授業」の前提として普段の学習方法

設問項目		全然当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらともいえぬ	少し当てはまる	非常に当てはまる	χ^2 値	p値	Cramer's V
		度数(%)	度数(%)	度数(%)	度数(%)	度数(%)			
①学習内容が厳しくても自分に必要だと思いつながら頑張る。	社会人学生	2(0.8%)	8(6.8%)	24(20.3%)	47(39.8%)	38(32.3%)	2.606	0.626 n.s.	0.090
	調整済み残差	-0.473	-1.521	0.221	0.557	0.331			
	高卒学生	3(1.4%)	25(12.1%)	40(19.3%)	76(36.7%)	63(30.4%)			
	調整済み残差	0.473	1.521	-0.221	-0.557	-0.331			
②後で困らない様に講義の内容をしっかりと聞く。	社会人学生	2(1.7%)	8(6.8%)	16(13.6%)	45(38.1%)	47(39.8%)	12.575	0.014 p<.05	0.197
	調整済み残差	-0.430	-0.890	-2.374	-0.348	3.172			
	高卒学生	5(2.4%)	20(9.7%)	51(24.6%)	83(40.1%)	48(23.2%)			
	調整済み残差	0.430	0.890	2.374	0.348	-3.172			
③勉強している途中でこれまでの学習内容について復習する。	社会人学生	9(7.6%)	15(12.7%)	29(24.6%)	48(40.7%)	17(14.4%)	4.481	0.345 n.s.	0.117
	調整済み残差	0.834	-1.825	0.283	1.148	-0.481			
	高卒学生	11(5.3%)	43(20.8%)	48(23.2%)	71(34.3%)	34(16.4%)			
	調整済み残差	-0.834	1.825	-0.283	-1.148	0.481			
④苦手な授業であってもよい成績を得ようと努力する。	社会人学生	2(1.7%)	12(10.2%)	23(19.5%)	41(34.7%)	40(33.9%)	1.127	0.890 n.s.	0.059
	調整済み残差	-0.153	-0.394	0.361	-0.785	0.830			
	高卒学生	4(1.9%)	24(11.6%)	37(17.9%)	81(39.1%)	61(29.5%)			
	調整済み残差	0.153	0.394	-0.361	0.785	-0.830			
⑤何を求められているのか考えうでないところを探しながら勉強する。	社会人学生	5(4.2%)	16(13.6%)	26(22.0%)	55(46.6%)	16(13.6%)	10.797	0.029 p<.05	0.182
	調整済み残差	-1.231	-1.622	-1.366	3.009	0.258			
	高卒学生	16(7.7%)	43(20.8%)	60(29.0%)	62(30.0%)	26(12.6%)			
	調整済み残差	1.231	1.622	1.366	-3.009	-0.258			
⑥よく分かっているところとそうでないところを探しながら勉強する。	社会人学生	2(1.7%)	15(12.7%)	22(18.6%)	53(44.9%)	26(22.0%)	5.460	0.243 n.s.	0.130
	調整済み残差	0.173	1.987	-1.432	0.420	-0.434			
	高卒学生	3(1.4%)	13(6.3%)	53(25.6%)	88(42.5%)	50(24.2%)			
	調整済み残差	-0.173	-1.987	1.432	-0.420	0.434			
⑦難しい学習に取り組む前に基礎が分かっているか確認する。	社会人学生	7(5.9%)	15(12.7%)	30(25.4%)	43(36.4%)	23(19.5%)	0.807	0.938 n.s.	0.050
	調整済み残差	0.429	-0.677	-0.320	0.301	0.361			
	高卒学生	10(4.8%)	32(15.5%)	56(27.1%)	72(34.8%)	37(17.9%)			
	調整済み残差	-0.429	0.677	0.320	-0.301	-0.361			
⑧一日にどれくらい学習するのか考えてから取り組む。	社会人学生	21(17.8%)	26(22.0%)	31(26.3%)	31(26.3%)	9(7.6%)	2.040	0.728 n.s.	0.079
	調整済み残差	0.432	-0.816	0.132	0.928	-0.886			
	高卒学生	33(15.9%)	54(26.1%)	53(25.6%)	45(21.7%)	22(10.6%)			
	調整済み残差	-0.432	0.816	-0.132	-0.928	0.886			
⑨試験勉強の前には計画を立てる。	社会人学生	15(12.7%)	20(16.9%)	29(24.6%)	37(31.4%)	17(14.4%)	1.352	0.853 n.s.	0.064
	調整済み残差	0.569	-0.531	-0.674	0.825	-0.139			
	高卒学生	22(10.6%)	40(19.3%)	58(28.0%)	56(27.1%)	31(15.0%)			
	調整済み残差	-0.569	0.531	0.674	-0.825	0.139			
⑩勉強は時間を決めてする。	社会人学生	29(24.6%)	25(21.2%)	31(26.3%)	25(21.2%)	8(6.8%)	2.429	0.657 n.s.	0.086
	調整済み残差	0.587	-0.611	0.928	-0.117	-1.153			
	高卒学生	45(21.7%)	50(24.2%)	45(21.7%)	45(21.7%)	22(10.6%)			
	調整済み残差	-0.587	0.611	-0.928	0.117	1.153			
⑪自分のできる範囲を考えたが勉強する。	社会人学生	14(11.9%)	13(11.0%)	25(21.2%)	48(40.7%)	18(15.3%)	5.726	0.221 n.s.	0.133
	調整済み残差	1.939	0.840	-1.267	0.103	-0.712			
	高卒学生	12(5.8%)	17(8.2%)	57(27.5%)	83(40.1%)	38(18.4%)			
	調整済み残差	-1.939	-0.840	1.267	-0.103	0.712			
⑫勉強をした後に何か楽しいことが出来ると思うとやる気がでる。	社会人学生	8(6.8%)	18(15.3%)	27(22.9%)	35(29.7%)	30(25.4%)	2.779	0.595 n.s.	0.092
	調整済み残差	-0.158	0.813	0.871	0.222	-1.490			
	高卒学生	15(7.2%)	25(12.1%)	39(18.8%)	59(28.5%)	69(33.3%)			
	調整済み残差	0.158	-0.813	-0.871	-0.222	1.490			

注：設問①～⑫で示す回答結果はすべて、社会人学生 118 名・高卒学生 207 名の度数 (%) を示す (合計 325 名)。

199名(61.2%)であった。さらに、社会人学生と高卒学生で補習授業の対象者か否かを分類すると、「対象者である」は社会人学生32名(27.1%)と高卒学生94名(45.4%)、「対象者ではない」は社会人学生86名(72.9%)と高卒学生113名(54.6%)であった($\chi^2(1)=10.593, p \leq .001, \phi = -0.181$)。

表4 「補習授業」対象者の割合

	対象者である	対象者ではない	合計
社会人学生 度数(%)	32(27.1%)	86(72.9%)	118(100.0%)
高卒学生 度数(%)	94(45.4%)	113(54.6%)	207(100.0%)
合計	126(38.8%)	199(61.2%)	325(100.0%)

$\chi^2(1)=10.593, p = .001, \phi = -.181$

表5 学習計画の立案「立てる・立てない」

	立てる	立てない	合計
社会人学生 度数(%)	73(62.9%)	43(37.1%)	116(100.0%)
高卒学生 度数(%)	147(73.9%)	52(26.1%)	199(100.0%)
合計	220(69.8%)	95(30.2%)	315(100.0%)

$\chi^2(1)=4.163, p = .056, \phi = -.115$ (無回答:10名)

4. 学習計画の立案とその遂行度

学生自らが、学業を成功裏に導くための積極的な姿勢として、学習計画の立案の有無を問うた。その結果が表5である。全体でみると315名中、全体で学習計画を「立てる」(自ら・教員指導の下)220名(69.8%)、「立てない」95名(30.2%)であった(無回答:10名)。また、社会人学生と高卒学生で比較したところ、学習計画を「立てる」学生は、社会人学生116名中73名(62.9%)、高卒学生199名中147名(73.9%)であった($\chi^2(1)=4.163, n.s., \phi = -.115$)。

また、表5で示した「無回答」10名中8名も含めて表6に示すように、学習計画を「立てる」学生(n=228)のうちその遂行度は、社会人学生/高卒学生の順に「80%以上」4名(5.3%)/6名(3.9%)、「50~80%」29名(38.7%)/50名(32.7%)、「30~50%」26名(34.7%)/64名(41.8%)、「10~30%」9名(12.0%)/22名(14.4%)、「全くできていない」7名(9.3%)/11名(7.2%)であった。なお、それらには有意な差はなかった($\chi^2(4)=1.906, p = .753, \text{Cramer's } V = .0914$)。

5. 学習計画の立案および成績と「補習授業」受講との関係

さらに、学習計画の「立てる」「立てない」の違いと直近の成績との関係を社会人学生と高卒学生、補習受講者・補習非受講者の区分で検討した。その結果が表7である。ここでの直近の成績とは、自校の定期試験の成績を指し、自己申告によりクラス内で「上位1/3」「中位1/3」「下位1/3」の3つに分けた。

まず、「学習計画を立てる学生」は社会人学生の「補習受講者」(21名)と「補習非受講者」(52名)の間で($\chi^2(2)=26.478, p < .001, \text{Cramer's } V = .602$)、また高卒学生(「補習受講者」63名、「補習非受講者」84名)も同様に両者の間で有意な差が確認された($\chi^2(2)=41.660, p < .001, \text{Cramer's } V = .532$)。残差分析では、成績が「上位1/3」の「補習非受講者」で調整済み残差が社会人学生2.829、高卒学生4.327であった。さらに、成績が「下位1/3」の「補習受講者」では、調整済み残差が社会人学生5.117、高卒学生6.201とともに有意に差があった。

「学習計画を立てない学生」においても「学習計画を立てる学生」と同様の傾向であった。つまり、社会人学生の「補習受講者」(10名)と「補習非受講者」(33名)の間では有意な差があり($\chi^2(2)=10.580, p < .001, \text{Cramer's } V = .496$)、高卒学生も両者(「補習受講者」26名、「補習非受講者」26名)の間で有意な差が確認された($\chi^2(2)=24.160, p < .01, \text{Cramer's } V = .682$)。残差分析では、成績が「上位1/3」の「補習非受講生」で調整済み残差が社会人学生2.642、高卒学生3.979であり、成績が「下位1/3」の「補習受講者」で調整済み残差が社会人学生2.848、高卒学生4.718であった。

6. 「補習授業」に対する感想

「補習授業」を受講する社会人学生(n=31)と高卒学生(n=90)において「補習授業」に対する感想を問うた。その結果が表8である。

設問項目①~⑨のうち有意な差があった項目は「⑥補習前と比べて自分の学力は向上していると感じますか」($\chi^2(4)=14.819, p < .01, \text{Cramer's } V = .350$)

「⑧現在の自分の状況を好ましいと感じますか」($\chi^2(4)=14.796, p<.01, \text{Cramer's } V=.350$) の2項目であった。それら2項目のうち「⑥補習前と比べて自分の学力は向上していると感じますか」は、残差分析による調整済み残差で社会人学生は「あまり感じない」2.845, 「全く感じない」2.301であった。さらに、「⑧現在の自分の状況を好ましいと感じますか」は社会人学生で「全く感じない」2.357, 高卒学生で「わからない」3.200を示した。

他の設問項目に社会人学生と高卒学生の比較で有意な差はなかった。それらは次の7項目である。「①国家試験補習授業を受けたくないと感じましたか」「②講義において一番に何を求めますか」「③講義において教員が一番学生に求めるものは何だと感じますか」「④講義内容の理解度はどの程度ですか」「⑤講義で理解できなかった部分の復習はどのタイミン

グで行いますか」「⑦現在、自分の学力を向上させる良い素質があると感じますか」「⑨国家試験に対する不安(危機感)はどの程度ありますか」。

7. 「補習授業」の受講者・非受講者および成績との関連

最後に、社会人学生と高卒学生の相違と「補習授業」の受講者・非受講者および成績との関連を示す。

まず、社会人学生と高卒学生のそれぞれで直近の定期試験の成績を自己申告により、クラス内で「上位 1/3」「中位 1/3」「下位 1/3」の3つに区分した(n=315, 無回答10名)。その結果、表9のとおり有意な差がみられた($\chi^2(2)=8.025, p<.05, \text{Cramer's } V=.160$)。また、回答選択肢では「上位 1/3」の社会人学生で調整済み残差2.08, 「下位 1/3」の高卒学生で2.68を示した。

次に、社会人学生と高卒学生における直近の定期

表6 学習計画を立てる学生のその遂行度

		80%以上	50~80%	30~50%	10~30%	全くできていない	合計
社会人学生	度数 (%)	4(5.3%)	29(38.7%)	26(34.7%)	9(12.0%)	7(9.3%)	75(100.0%)
	調整済み残差	0.500	0.900	-1.000	-0.500	0.600	
高卒学生	度数 (%)	6(3.9%)	50(32.7%)	64(41.8%)	22(14.4%)	11(7.2%)	153(100.0%)
	調整済み残差	-0.500	-0.900	1.000	0.500	-0.600	
合計		10(4.4%)	79(34.6%)	90(39.5%)	31(13.6%)	18(7.9%)	228(100.0%)

$\chi^2(4)=1.906, p=.753, \text{Cramer's } V=.0914$

表7 学習計画の立案および成績と「補習授業」との関係

		上位1/3	中位1/3	下位1/3	合計	χ^2 値	p値	Cramer's V				
学習計画を立てる学生	社会人学生	度数 (%)	2(9.5%)	4(19.0%)	15(71.4%)	21(100.0%)	26.478	0.000 p<.001	0.602			
	補習受講者	調整済み残差	-2.829	-2.018	5.117							
	社会人学生	度数 (%)	23(44.2%)	23(44.2%)	6(11.5%)	52(100.0%)						
	補習非受講	調整済み残差	2.829	2.018	-5.117							
	高卒学生	度数 (%)	3(4.8%)	16(25.4%)	44(69.8%)	63(100.0%)				41.660	0.000 p<.001	0.532
	補習受講者	調整済み残差	-4.327	-2.608	6.201							
高卒学生	度数 (%)	29(34.5%)	39(46.4%)	16(19.0%)	84(100.0%)							
補習非受講	調整済み残差	4.327	2.608	-6.201								
学習計画を立てない学生	社会人学生	度数 (%)	0(0.0%)	4(40.0%)	6(60.0%)	10(100.0%)	10.580	0.005 p<.01	0.496			
	補習受講者	調整済み残差	-2.642	0.034	2.848							
	社会人学生	度数 (%)	15(45.5%)	13(39.4%)	5(15.2%)	33(100.0%)						
	補習非受講	調整済み残差	2.642	-0.034	-2.848							
	高卒学生	度数 (%)	1(3.8%)	4(15.4%)	21(80.8%)	26(100.0%)				24.160	0.000 p<.001	0.682
	補習受講者	調整済み残差	-3.979	-1.317	4.718							
高卒学生	度数 (%)	14(53.8%)	8(30.8%)	4(15.4%)	26(100.0%)							
補習非受講	調整済み残差	3.979	1.317	-4.718								

表 8 「補習授業」に対する感想

		感じた	感じたがやらないと いけないと思った	感じない	—	—	χ^2 値	p値	Cramer's V	
① 国家試験補習授業を 受けたくないと感じま したか、	社会人学生	度数(%)	3(9.7%)	8(25.8%)	20(64.5%)	—	—	0.636	0.728	0.072
		調整済み残差	0.797	-0.094	-0.333	—	—			
	高卒学生	度数(%)	5(5.6%)	24(26.7%)	61(67.8%)	—	—			
		調整済み残差	-0.797	0.094	0.333	—	—			
② 講義において一番に 何を求めますか、	社会人学生	度数(%)	1(3.2%)	10(32.3%)	12(38.7%)	1(3.2%)	7(22.6%)	8.641	0.071	0.267
		調整済み残差	-1.684	-1.606	2.230	-0.029	1.052			
	高卒学生	度数(%)	13(14.4%)	44(48.9%)	17(18.9%)	3(3.3%)	13(14.4%)			
		調整済み残差	1.684	1.606	-2.230	0.029	-1.052			
③ 講義において教員が 1番学生に求めるもの は何だと感じますか、	社会人学生	度数(%)	5(16.1%)	17(54.8%)	3(9.7%)	3(9.7%)	3(9.7%)	3.578	0.466	0.172
		調整済み残差	-0.474	1.547	0.551	-0.812	-1.191			
	高卒学生	度数(%)	18(20.0%)	35(38.9%)	6(6.7%)	14(15.6%)	17(18.9%)			
		調整済み残差	0.474	-1.547	-0.551	0.812	1.191			
④ 講義内容の理解度は どの程度ですか、	社会人学生	度数(%)	1(3.2%)	12(38.7%)	13(41.9%)	5(16.1%)	—	6.690	0.082	0.235
		調整済み残差	-0.294	-1.943	0.980	2.138	—			
	高卒学生	度数(%)	4(4.4%)	53(58.9%)	29(32.2%)	4(4.4%)	—			
		調整済み残差	0.294	1.943	-0.980	-2.138	—			
⑤ 講義で理解できな かった部分の復習はど のタイミングで行いま すか、	社会人学生	度数(%)	0(0.0%)	9(29.0%)	5(16.1%)	14(45.2%)	3(9.7%)	5.426	0.246	0.212
		調整済み残差	-2.240	-0.102	0.386	1.065	0.331			
	高卒学生	度数(%)	13(14.4%)	27(30.0%)	12(13.3%)	31(34.4%)	7(7.8%)			
		調整済み残差	2.240	0.102	-0.386	-1.065	-0.331			
⑥ 補習前と比べて自分 の学力は向上してい ると感じますか、	社会人学生	度数(%)	3(9.7%)	14(45.2%)	7(22.6%)	4(12.9%)	3(9.7%)	14.819	0.005	0.350
		調整済み残差	-1.069	-1.436	0.306	2.845	2.301			
	高卒学生	度数(%)	16(17.8%)	54(60.0%)	18(20.0%)	1(1.1%)	1(1.1%)			
		調整済み残差	1.069	1.436	-0.306	-2.845	-2.301			
⑦ 現在、自分の学力に 対して良い素質があ ると感じますか、	社会人学生	度数(%)	3(9.7%)	2(6.5%)	14(45.2%)	5(16.1%)	7(22.6%)	3.714	0.446	0.175
		調整済み残差	1.799	-0.243	-0.465	-0.600	0.445			
	高卒学生	度数(%)	2(2.2%)	7(7.8%)	45(50.0%)	19(21.1%)	17(18.9%)			
		調整済み残差	-1.799	0.243	0.465	0.600	-0.445			
⑧ 現在の自分の状況を 好ましいと感じます か、	社会人学生	度数(%)	0(0.0%)	4(12.9%)	2(6.5%)	8(25.8%)	17(54.8%)	14.796	0.005	0.350
		調整済み残差	-0.589	1.968	-3.200	-0.213	2.357			
	高卒学生	度数(%)	1(1.1%)	3(3.3%)	33(36.7%)	25(27.8%)	28(31.1%)			
		調整済み残差	0.589	-1.968	3.200	0.213	-2.357			
⑨ 国家試験に対する不 安(危機感)はどの程 度ありますか、	社会人学生	度数(%)	22(71.0%)	8(25.8%)	1(3.2%)	0(0.0%)	0(0.0%)	3.286	0.511	0.165
		調整済み残差	-0.505	1.441	-0.708	-0.589	-0.837			
	高卒学生	度数(%)	68(75.6%)	13(14.4%)	6(6.7%)	1(1.1%)	2(2.2%)			
		調整済み残差	0.505	-1.441	0.708	0.589	0.837			

注：すべての設問項目のn数は、社会人学生n=31、高卒学生n=90（合計n=121）。

試験の成績を、「補習受講者」と「補習非受講者」で比較した。表 10 に示すとおり、社会人学生と高卒学生ともに補習受講者・非受講者間で有意な差がみられた(社会人学生： $\chi^2(2)=36.009, p<.001, Cramer's V=.557$ 、高卒学生： $\chi^2(2)=65.580, p<.001, Cramer's V=.574$)。残差分析の結果から調整済み残差を確認すると、定期試験の成績「上位 1/3」の社会人学生

(調整済み残差：3.836)と高卒学生(5.713)はいずれも「補習非受講者」であった。一方、「下位 1/3」の学生では社会人学生(5.844)と高卒学生(7.778)がともに「補習受講者」であることがわかった。

IV. 考察

事後検定で、調査協力を得たサンプルサイズの信頼性を検討した。その結果、許容誤差 4.0%、信頼度 95%、回答比率 50%として算出すると必要なサンプルサイズは 271 名であった。このことを考慮すると、今回の調査はそれ以上のサンプルサイズの 325 名であったこと、また、一般的なアンケート調査の目安である許容誤差 5%以下および信頼度 95%を加味すると、上記の算出範囲で今回の調査に信頼性があると考えられる^{15,16)}。

以上を前提に、「I. はじめに」の 3. 本研究の目的と、「III. 結果」で示した 7 つの実態を下敷きに、ここでは総合的に考察を行う。あわせて、本稿の副題でもある社会人学生と高卒学生の差異に注目し論を進める。

なお、残差分析における調整済み残差では、その絶対値 5%の標準正規偏差値 1.96 以上を参考に、今回は 2.000 以上に注目した。

1. 学習の前提としての普段の学習方略

前述のとおり、表 3 のうち「②後で困らない様に講義の内容をしっかりと聞く」「⑤何を求められているのか考えてから課題をする」の 2 項目に、社会人学生と高卒学生との間にそれぞれ有意な差があった。このことから、社会人学生は高卒学生より講義をし

っかり聞く、という姿勢が確認された。一方、「⑤何を求められているのか考えてから課題をする」では、逆に高卒学生が少なく対照的な結果であった。それら 2 つの項目にみる「学習方略」のありようが、社会人学生と高卒学生の差異によるところは興味深い結果と言える。

ここからは、全体的に学生の傾向を知る目的で有意差がなかった設問項目において、回答率の高い選択肢に着目し考察する。

第 1 に、「①学習内容が厳しくても自分に必要だと思いつながりながら頑張る」は、「少しあてはまる」「非常にあてはまる」のそれぞれが社会人学生と高卒学生とも 30%以上であった。一つに、国家試験受験を控えた 3 年生の意識が反映されているのかも知れない。

第 2 に、設問項目の順を一つ繰り上げ「④苦手な授業であつてもよい成績を得ようと努力する」で 30%以上の回答選択肢は、社会人学生で「少しあてはまる」(34.7%)「非常にあてはまる」(33.9%)であり、高卒学生は「少しあてはまる」(39.1%)であった。社会人学生と高卒学生の意識の差が明確となり、高卒学生に比べ社会人学生の努力する意識の高さが垣間みられた。

第 3 に、「③勉強している途中でそれまでの学習内容について復習する」「⑥よく分かっているところと

表 9 直近の定期試験の成績はまるものについて

		上位1/3	中位1/3	下位1/3	合計
社会人学生	度数 (%)	40(34.5%)	44(37.9%)	32(27.6%)	116(100.0%)
	調整済み残差	2.080	0.764	-2.680	
高卒学生	度数 (%)	47(23.6%)	67(33.7%)	85(42.7%)	199(100.0%)
	調整済み残差	-2.080	-0.764	2.680	

$\chi^2(2)=8.025, p=.018, \text{Cramer's } V=.160$

表 10 直近の定期試験の成績と「補習授業」の関係

		上位1/3	中位1/3	下位1/3	合計	χ^2 値	p値	Cramer's V
社会人学生	度数 (%)	2(6.5%)	8(25.8%)	21(67.7%)	31(100.0%)	36.009	0.000	0.557
	補習受講者	調整済み残差	-3.836	-1.625				
社会人学生	度数 (%)	38(44.7%)	36(42.4%)	11(12.9%)	85(100.0%)	65.580	p<.001	0.574
	補習非受講	調整済み残差	3.836	1.625				
高卒学生	度数 (%)	4(4.5%)	20(22.5%)	65(73.0%)	89(100.0%)	65.580	0.000	0.574
	補習受講者	調整済み残差	-5.713	-3.006				
高卒学生	度数 (%)	43(39.1%)	47(42.7%)	20(18.2%)	110(100.0%)	65.580	p<.001	0.574
	補習非受講	調整済み残差	5.713	3.006				

そうでないところを探しながら勉強する」「⑦難しい学習に取り組む前に基礎が分かっているか確認する」

「⑩自分のできる範囲を考えながら勉強する」の4項目は、社会人学生と高卒学生ともに「少しあてはまる」と「非常にあてはまる」の合計がいずれも半数以上の回答選択肢であった。これらをまとめると、社会人学生と高卒学生とも復習・探求・基礎の確認・できる範囲の確認、という学習方略を普段行っていると考えられる。

第4に、「⑧一日にどれくらい学習するのか考えてから取り組む」「⑩勉強は時間を決めてする」の2項目では、30%以上を示す回答選択肢はなかった。これらの設問は時間がキーワードであり、社会人学生と高卒学生ともに時間管理に関する学習方略は、あまり重視しないのかも知れない。

第5に、「⑨試験勉強の前には計画を立てる」は社会人学生の「少しあてはまる」に、「⑫勉強をした後に何か楽しいことが出来ると思うとやる気がでる」は高卒学生の「非常にあてはまる」にそれぞれ30%以上の回答選択肢であった。端的に表現すると、計画性を立てる社会人学生と学習後の楽しみを思い描く高卒学生、と言える。

2. 学習を成功裏に導く学習計画とその遂行度

学習計画を「立てる」「立てない」には社会人学生と高卒学生に差異はみられないが、学習計画を「立てる」学生は社会人学生と高卒学生ともに多い。学習計画を「立てる」学生のその遂行度で「80%以上」の学生はごく少数であった。さらに、学習計画を「立てない」学生に対して如何に学習指導を行うのか、そして学習計画を「立てる」学生であっても、その計画を遂行するための学修支援のありようが課題と思われる。

松田ら¹⁷⁾によると「学習計画習慣のある学生は、中期に最も多く教材を視聴し、学習計画の習慣がない学生は、後期に集中的に教材に取り組んでいる」

(著者注：引用文の「中期」,「後期」は任意の遠隔授業の開講期間を指す)と述べていることから、補習開始時期や回数のばらつきは無視できない。今回

のアンケート調査ではその内容を問う項目がなく不明である。

3. 学習計画の立案と成績および「補習授業」との関係

学習計画の立案の有無と直近の定期試験の成績との関係では、社会人学生と高卒学生の補習受講者・非受講者それぞれの相違から、学習計画を「立てる」社会人学生の「補習受講者」と「補習非受講者」の間では有意な差があり、高卒学生も同様に有意な差が確認できた。残差分析では、成績が「上位1/3」の「補習非受講生」で社会人学生と高卒学生が有意に多く、「下位1/3」の「補習受講者」で社会人学生と高卒学生がともに多いこともわかった。学習計画を「立てない」学生もそれと同様の傾向が確認できた。つまり、社会人学生の「補習受講者」と「補習非受講者」の間では有意な差がみられ、高卒学生も両者の間で有意な差が存在する。

学習計画立案の有無に関して石川ら¹⁸⁾は、一般的な社会人学生の傾向として、自己調整学習方略による学習計画の立案を指摘している。また、学習の「動機づけ」には年齢が強く関与し、社会人学生は積極的に講義を聴こうとする意識が高く、課題の作成においては出題者の意図を汲もうとする傾向が強い¹⁹⁾。社会人経験が自己を客観的に理解し、学習行動や学習意欲を調整する要因と考えられる。

今回の結果から見えてきたことは、高卒学生との違いとして社会人学生の学習姿勢は学習計画の立案に加え、学力を補う補習授業の対象であるか否かも考慮する必要があると考えられる。

4. 社会人学生と高卒学生の「補習授業」の感想

ここで、「補習授業」に対して受講者はどのように受け止めていたのか、その実情を知る目的で社会人学生・高卒学生の補習受講者からの感想を検討する。ただし、 χ^2 検定(含、残差分析)とあわせ、網羅的に学生の傾向を知る目的で、有意差がなかった設問項目において回答率が30%以上の選択肢に注目した。

まず、社会人学生と高卒学生の比較で有意な差があった2項目(表8:設問項目⑥・⑧)について、自

己効力感を下敷きに検討を加える。ここでいう自己効力感とは「ある状況を変化させる手段を遂行することに対する自己評価で、遂行できるという確信の程度」²⁰⁾とする。まず「⑥補習前と比べて自分の学力は向上していると感じますか」では、社会人学生と高卒学生がともに「多少感じる」が多く回答するが、残差分析からは社会人学生に「あまり感じない」「全く感じない」が有意に多いことがわかった。さらに「⑧現在の自分の状況を好ましいと感じますか」では、社会人学生は「全く感じない」が最も多く、高卒学生では「わからない」が多くを占めた。残差分析からは、社会人学生で「全く感じない」、高卒学生で「わからない」が有意に多いことがわかった。それらを踏まえ「補習授業」を受講する学生は学力面での自己効力感は低い、と捉えることができる。今後、他者（教員や学生）の体験を見本とする「代理経験」、つまり成功できると思われるような「言語的説得」などを工夫し、日常的教育実践の場で如何に学生の自己効力感を向上させるのか、今後の課題と思われる。

ここからは、表8から学生の回答傾向を考察する。

第1に「①国家試験補習授業を受けたくないと感じましたか」は、社会人学生と高卒学生のいずれも「感じない」を多く示し、「補習授業」を受け入れる多数の学生の存在が明らかとなった。これは、学力向上のために必要な事だと肯定的に「補習授業」を捉えた結果かも知れない。

第2に「②講義において一番に何を求めますか」は、社会人学生は「要点のまとめ」と「重要事項の確認」を示し、高卒学生は「要点のまとめ」という学習成果の即効性を求め、社会人学生との意識の違いがうかがわれた。補習授業を受講する学生のニーズを満たす上で、学生の属性を考慮する重要な視点と言える。

第3に「③講義において教員が一番学生に求めるものは何だと感じますか」は、社会人学生と高卒学生のいずれも「能動的な学習姿勢」であった。学生側からすると、教員が求める学生への学習の姿勢として、アクティブ・ラーニング的な姿勢を暗に感じ取

っていることが推察される。しかし、能動的な姿勢を教員が学生に求めると感じ取ったとしても、学生がその姿勢で実際に学習活動を行っている確証はない。改めて検討の余地がある。

第4に「④講義内容の理解度はどの程度ですか」は、社会人学生と高卒学生はともに「まあまあ理解できる」と「少し理解できないところがある」に二分した。今回の結果だけで考察を行うことは早計であるが、この結果から推察すると、補習における講義内容は従来以上に丁寧な教授が求められていると考えられる。

第5に「⑤講義で理解できなかった部分の復習はどのタイミングで行いますか」は、社会人学生が「必要と感じるまで」が多く、高卒学生は「必要と感じるまで」「次の日や週末時間がある時に」が多かった。社会人学生は仕事と勉学の両立に励む学生が多いことから、必要に迫られながら勉学に励むという、社会人学生の特徴がうかがわれる結果となった。しかし、今回の調査では仕事内容を問う項目はなく、職業上の違いが及ぼす影響から、本設問の結果を掘り下げることができない。

第6に「⑦現在、自分の学力を向上させる良い素質があると感じますか」は「どちらともいえない」が多く回答した。先の自己効力感の低さが反映していると思われる。

第7に「⑨国家試験に対する不安（危機感）はどの程度ありますか」は、社会人学生と高卒学生がいずれも「感じる」を多く選択した。これは当然の結果であり、不安への払拭を目指すきめ細やかな学習指導や、先に述べた自己効力感の涵養も課題と思われる。

5. 直近の定期試験の成績と「補習授業」との関係

直近の定期試験において、クラス内の成績を自己申告により「上位 1/3」「中位 1/3」「下位 1/3」の3つに区分し検討した結果、「上位 1/3」で社会人学生が「下位 1/3」で高卒学生が、残差分析からそれぞれ有意に多いことがわかった。このことは、社会人学生は真面目で学習動機も高卒学生に比べ高いと考え

られ、そのことが端的に反映した結果であると推察できる。

さらに、直近の定期試験の成績を「補習受講者」と「補習非受講者」とで比較した結果、社会人学生と高卒学生ともに補習受講者・非受講者の間で有意な差がみられた。全体として、成績が「上位 1/3」の学生に「補習非受講者」が多く、「下位 1/3」に「補習受講者」が多い。このことは、従来当然として捉えていた現象、つまり成績不良者は補習を受講する、といった言説が今回改めて確認され、成績不良者への学修支援としての補習授業の意義を再考する契機になったと思われる。

V. 結語

本研究では、あはき専門学校におけるリメディアル教育としての「補習授業」に関して、3年生に対するアンケートを実施し、その実態を検討した。その結果、以下に示す「補習授業」の実態が明らかとなった。

第1に、学習方略で「後で困らない様に講義の内容をしっかりと聞く」「何を求められているのか考えてから課題をする」学生は、高卒学生より社会人学生に多かった。

第2に、学習計画立案の有無は、社会人学生と高卒学生の両者に差は無く学習計画を「立てる」が多くみられた。また、学習計画の遂行度は「30～50%」「50～80%」程度であった。

第3に、学習計画を「立てる」は両者ともに「補習授業」受講者で成績が「下位 1/3」の学生に多く、「補習授業」非受講者で成績が「上位 1/3」の学生に多かった。また、学習計画を「立てない」も、両者ともに「立てる」と同様の結果を示した。

第4に、「補習授業」の感想は「補講前と比べて自分の学力は向上していると感じますか」「現在の自分の状況を好ましいと感じますか」に、高卒学生より社会人学生に否定的な回答が多かった。また、両者の受講者は自己効力感が低い傾向にあった。

第5に、「補習授業」受講者・非受講者と成績の関

係では、両者ともに非受講者は「上位 1/3」、受講者は「下位 1/3」であった。

次に、本研究の限界を述べる。1つに、調査の実施時期や各あはき専門学校の補習授業の開講時期や回数がバイアスになっている可能性が考えられ、それらを排除するには限界がある。2つに、設問項目の一つに性別を設定しておらず、その点を加味した分析がない点がある。性別の設定により社会人学生と高卒学生の比較の他、何らかの学生の実態をさらに見いだせたかも知れない。3つに、あはき専門学校をフィールドとする調査研究で、筆者らの知る限り本調査に関連した先行研究は皆無で、その意味で網羅的・探索的な調査に終始した点は否めない点である。

最後に、本研究で得た知見を基に、あはき専門学校のリメディアル教育全体のPDCA サイクル(Plan: 計画, Do: 実行, Check: 評価, Action: 改善)に敷衍すると、今回の調査結果はCの段階、つまりC(Check: 評価)に紐付く現状把握と位置づけることができると考えられる。さらに、他の要素(Plan, Do, Action)を実装する動因にもなり得ると期待できる。

謝辞: 今回のアンケート調査にご協力いただいた全国の学生の皆さんに感謝いたします。

また、本稿は令和3年度修士学位論文に加筆・修正を加え再構成したものです。修士論文作成に際して、さまざまなご助言やご指導をいただいた諸先生に深謝いたします。

利益相反: 本研究において筆者らは開示すべき利益相反はない。

文献

1. 日本経済新聞. リアル大学全入時代、ようやく実現? 23年4月にも(2021年7月23日付). <https://www.nikkei.com/article/DGXZQ0FE25C960V20C21A6000000/> (Access: 2022. 5. 3)
2. 専門学校新聞社. 学校基本調査の概要. <http://>

- //www.senmon.co.jp/FMPro?-db=link_fmj&-lay
y=CGI&-format=kc_shosai01.html&-error=err
or.html&-find (Access : 2022. 5. 4)
3. 半澤礼之:大学生における「学業に対するリア
リティショック」尺度の作成. キャリア教育研
究, 25:15-24, 2007.
 4. 田中秀和:技術者教育におけるリメディアル教
育の理論. 技術倫理研究, 9:35-50, 2012.
 5. 文部科学省. 第3章 新時代における高等教育機
関の在り方. [https://www.mext.go.jp/b_menu/
shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1335
595.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1335595.htm) (Access : 2022. 1. 16)
 6. 吉本圭一. 専門学校の発展と高等教育の多様化.
高等教育研究, 第6集:83-103, 2003.
 7. 荒井克彦, 羽田貴史:大学のリメディアル教
育. 広島大学大学教育研究センター, 高等教
育研究叢書, 42:1-7, 1996.
 8. 穂屋下茂:日本リメディアル教育学会の活動に
ついて. リメディアル教育研究, 6(1):1-2, 2011.
 9. 石毛弓, 吉沢一也:学士力の育成におけるリメ
ディアル教育の可能性. リメディアル教育研究,
7(1):33-26, 2012.
 10. 谷川裕稔:学士力育成に向けてのリメディアル
教育のあり方(特集号企画を振り返って). リメ
ディアル教育研究, 4(2):133-136, 2009.
 11. 芝崎順司, 辻靖彦:放送大学におけるリメディ
アル教育の在り方の検討. 放送大学研究年報,
第36号:139-147, 2018.
 12. 濱名篤, 川嶋太津夫編著:初年次教育 歴史・理
論・実践と世界の動向. 丸善出版, 東京, pp. 5-8,
2006.
 13. 谷川裕稔, 長尾佳代子:再考:「リメディアル教育」
概念. リメディアル教育研究, 8(1):43-48, 2013.
 14. 藤田正:メタ認知的方略と学習課題先延ばし行
動の関係. 奈良教育大学教育実践総合センター
研究紀要, 19:81-86, 2010.
 15. 小谷祐樹, 川口敦, 志馬伸朗:アンケートを用い
た質の高い調査研究を行うための手引き. 日本
集中治療医学会雑誌. 28(3):180-188, 2021.
 16. 曾根原容子, 谷口博志, 藤本英樹ら:美容鍼灸に
対する一般女性の認識と課題に関する調査研
究. 全日本鍼灸学会雑誌, 72(3):190-202, 2022.
 17. 松田岳士, 山田政寛:学習計画習慣の有無によ
る e ラーニングにおける学習行動の相違につい
て. 日本教育工学会論文誌, 33:113-116, 2009.
 18. 石川奈保子, 向後千春:大学通信教育課程の社
会人学生における自己調整学習方略間の影響
関係の分析. 日本教育工学会論文誌, 40(4):315
-324, 2017.
 19. 河井正隆, 宇都宮由美子:専門学校学生(鍼灸学
科)の学習技能・意欲に関する実態調査. 全日
本鍼灸学会雑誌, 47(1), 14-29, 1997.
 20. 江本リナ:自己効力感の概念分析. 日本看護科
学会誌, 20(2):39-45. 2000.

RESEARCH ON REMEDIAL EDUCATION “SUPPLEMENTARY LESSON” AT AMMA-
MASSAGE-SHIATSU, ACUPUNCTURE AND MOXIBUSTION THERAPISTS
TRAINING FACILITY
— FOCUSING ON THE DIFFERENCE IN CONSCIOUSNESS BETWEEN ADULT STUDENT
AND HIGH SCHOOL GRADUATE STUDENT —

Tomomi Nakai^{1), 2)}, Masataka Kawai³⁾

¹⁾ *Graduate School of Acupuncture and Moxibustion, Meiji University of Integrative Medicine*

²⁾ *Shizuoka Medical Treatment Professional College*

³⁾ *Department of Basic Liberal Arts, Meiji University of Integrative Medicine*

Abstract

The purpose of this research is to clarify the actual situation of supplementary lesson, which is remedial education, at Amma-Massage-Shiatsu, Acupuncture and Moxibustion Therapists Training Facility (Ahaki Vocational Schools) from the students questionnaire survey.

We conducted an awareness survey using google forms for 493 third-year students enrolled in 21 schools (26.6%) who received survey cooperation from 79 Ahaki Vocational Schools (August to October 2021). Responses were obtained from 325 third-year students from 21 schools (65.9% response rate).

From the results of the analysis, the following conclusions were obtained. Firstly, there were more working students than high school graduates who chose to value the present as a learning strategy. Secondly, there was no difference between the two groups in terms of creating a study plan, with more students “making” a study plan. Thirdly, in terms of the relationship between creating a study plan and grades, both students who “made a study plan” were in the “lower 1/3” of grades. Fourthly, in terms of the relationship between attending “supplementary classes” and regular exam grades, for both groups, those who did not attend were in the “upper 1/3” and those who did attend were in the “lower 1/3” .

It was found that working students place more emphasis on their current studies than high school graduates. Students with high grades were less likely to take supplementary classes, and it can be said that the presence or absence of a study plan does not have a significant impact on grades.

This survey has shed light on the true nature of “supplementary classes” as remedial education.